

日本語能力試験「文法」の問題項目分析

— テイルの問われ方と困難度との関係について —

桑名翔太・小野澤佳恵・北村尚子

〔キーワード〕 日本語能力試験、テイル、文法項目の難易度、問題項目の難易度、錯乱枝構成

〔要旨〕

日本語能力試験「文法」の問題項目を設定する際、ターゲット、錯乱枝ともにそのレベル相当の文法項目を用いていれば、常にそのレベル相当の問題項目になるとはいえない。例えば、「動詞のテイル形」は、日本語能力試験「文法」の「出題基準」で4級の文法項目とされている。しかし、過去23年分のテイルの問題項目について分析データを参照したところ、4級では難しい問題項目、さらには、3級でも難しい問題項目が見られた。詳しく分析を行ってみると、級ごとに困難度の上がる要因のあることがわかった。具体的には、シカを絡めて問うと4級では難しく、テアル、テオク、自動詞・他動詞、マダ、ガル、タガルを絡めて問うと3級でも難しい問題項目になる。このように、4級の文法項目でも、問い方によって難易度が異なる。文法項目自体のレベル設定だけでなく、問い方によるレベル設定にも留意することで、受験者の能力を的確に測ることができるのではないかと考える。

1. はじめに

日本語能力試験（The Japanese-Language Proficiency Test、以下 JLPT と略す）は、「主に日本語を母語としない人を対象として、公的に日本語能力を測定し、認定することを目的として実施している。海外では国際交流基金が各地の現地実施機関と共催して実施しており（台湾においては、財団法人交流協会が実施している）、日本国内においては財団法人日本国際教育支援協会が実施している」（『日本語能力試験分析評価に関する報告書』2006：29）。また、「1992年度以降は毎年度『日本語能力試験に関する分析報告書』が公表され、試験の問題項目や試験全体の性能が評価されてきた」（野口他2007：70）。

また、JLPT 問題作成にあたっては、その参考のために「出題基準」が作られ、平成6（1994）年から公開されている。この中には、出題の目安として、級ごとに「文字」「語彙」「文法」のリストないしサンプルが掲げられている。

しかし、これまでの JLPT の文法問題項目の分析データを見ると、ターゲットも錯乱枝^①も出題級以下の文法項目であるにもかかわらず、出題級よりも高いレベルの困難度を示す場合がある。一体、そのようになる要因は何だろうか。また、文法項目をどのように問えば受験者の

能力を的確に測れるようになるのだろうか。本稿では、次のように考える。

- ・ 文法項目の難易度だけでなく、錯乱枝構成といった問い方による難易度も、問題項目の難易度に影響するのではないか。
- ・ ターゲットとなる文法項目について、問い方による難易度を詳しく設定すれば、各レベルに合った能力を的確に測ることができるのではないか。

そこで本稿では、JLPTにおいて出題頻度の高い、テイルを例にとって、昭和59 (1984) 年度から平成18 (2006) 年度までの過去23回分の問題項目を分析することにした。今回は、テイルの、意味用法からではなく形式から、問い方のパターンを分析し、困難度の上がる要因を体系的に示す。このような試みは今までなされたことはない。ちなみに、『日本語能力試験分析評価に関する報告書』(以下、『分析報告書』と略す)では、平成6 (1994) 年度から、「試験問題の内容と分析」という章が加わり、正答率あるいは識別力の低い問題項目について、その要因の分析が記述されるようになった。しかしそれは、その回の個別の問題項目ごとの分析であり、困難度の上がる問い方について体系立ってまとめられてはいない。

分析では、その問題項目の困難度を、基本的には正答率で判断する⁽²⁾。ただし、正答率だけでは、年度間で受験者も問題項目も異なるため、そのとき偶然そういう数値を示したにすぎないという可能性を排除できない。そのため、正答率を拠り所としながらも、個々の問題項目の、選択枝の選択率なども考慮しながら分析を行う。また、野口他 (2007) で、平成13 (2001) 年度 JLPT の四つの級を垂直等化するという試みについての報告がされている。この等化分析によって、全級全問題項目の困難度を、共通尺度上で議論することができるため、その分析結果も参考にしたい。

2. テイルの出題状況

はじめにテイルの出題状況を見る。過去23回分の空所補充形式の問題項目のうち、『分析報告書』を参考にして、テイルがターゲットになっていると判断したものを、テイルの問題項目として、分析対象とする。ターゲットでなく錯乱枝にテイルを含む問題項目は対象としない。表1に、出題級ごとの、出題数、平均正答率、平均識別力を示す。なお、『日本語能力試験出題基準【改訂版】』(2006) (以下、『出題基準』と略す)において、テイルは、「動作のテイル形」として、4級の文法項目に挙げられている。

表1. テイルの出題状況

出題級	出題数	平均正答率	平均識別力
4 級	23問／23回	0.453	0.329
3 級	30問／23回	0.523	0.357
2 級	1 問／23回	0.874	0.268
1 級	0 問／23回	—	—

テイルの出題頻度は高く、3級、4級では、平均して毎回1問以上出題されている。困難度の点から見ても、4級で平均正答率0.453、平均識別力0.329、3級で平均正答率0.523、平均識別力0.357であり、全体的には、テイルの問題項目は、4級でも3級でも出題されて妥当であるといえる。このようにテイルが、『出題基準』で4級文法項目であるにもかかわらず、3級でも出題されて妥当な正答率を示しているという点が、今回問題とするところであり、そうなる要因があるはずである。ちなみに、2級での出題は、3級の問題項目との重ね合わせであり、正答率が高い。重ね合わせとは、全く同じ問題項目を、同じ回に、連続する異なる級で出題することである。また、1級でのテイルの出題は無い。

3. 問い方のパターン

テイルをターゲットとした問題項目の問い方のパターンは、大きく、①正しい活用形を問う場合、②複合的にテイルを問う場合、③単一的にテイルを問う場合の三つに分けられる。うち、①は4級でしか見られない。それぞれの場合について、問題項目例を示す。正答選択枝に*を付け、各選択枝の後に選択率を示す。無答率は示さない。問題文の後に、出題級、出題年度、正答率、識別力を示す。問題文の空所は下線で、選択枝番号は算用数字で示す。文節単位の分かち書きにし、漢字表記、ひらがな表記はそのままにして、ルビは省く。年度によって、表記など書式が異なるため、統一を図った。

①正しい活用形を問う場合

テ形の正しい形を問う場合と、イルに前接する正しい活用形を問う場合とがある。そしてさらには、両者を合わせた場合もある。

(例1) ジョンさんは いま うみで _____ います。

1 およいて (8.9) *2 およいで (63.5) 3 およんで (20.1) 4 およって (6.7)

4 級 (1987)、正答率 : 0.635、識別力 : 0.451

(例1) は、「およぐ」のテ形「およいで」の正しい形を問う場合である。錯乱枝はどれも「およぐ」の活用形でなく、非文法的な形である。

(例2) 「みせは あきましたか。」

「いいえ、まだ _____ います。」

1 しまる (5.1) 2 しまり (9.9) *3 しまって (74.6) 4 しまった (9.5)

4級 (1995)、正答率：0.746、識別力：0.437

(例2) は、「います」に前接する正しい活用形「しまって」を問う場合である。錯乱枝はどれも「しまる」の活用形である。

(例3) 「としょかんの 本は かえしましたか。」

「いいえ、まだ _____ います。」

1 読みて (7.7) 2 読みた (3.1) *3 読んで (80.8) 4 読んだ (8.1)

4級 (1998) 正答率：0.808、識別力：0.386

(例3) は、テ形の正しい形を問う場合と、イルに前接する正しい活用形を問う場合とを合わせた場合である。錯乱枝の、「読みて」「読みた」は「読む」の活用形でなく、「読んだ」は「読む」の活用形である。

②複合的にテイルを問う場合

呼応や修飾が関わってテイルがターゲットになっている場合と、テイルと他の文法項目とを組み合わせた表現がターゲットになっている場合とがある。そしてさらには、両者を合わせた場合もある。過去23回分の問題項目においては、マダ (4級)、モウ (4級)、シカ (4級)、トキ (4級)、～N (連体修飾) (4級)、ガル (3級)、タガル (3級)、ヨウトスル (3級)、ウチニ (2級)、アイダ (無し)、アイダニ (無し) を、テイルと絡めて出題している。() 内の級情報は、『出題基準』に示されている、それぞれの文法項目の級である。

(例4) けさ、少し おそく 学校へ 行くと、もう 教室に ヤンさんが _____。

1 来ます (2.1)

2 来ました (32.2)

3 来て いましよう (2.3)

*4 来て いました (62.4)

3級 (1987)、正答率：0.624、識別力：0.428

(例4) は、モウと絡めて、テイルを問うている。錯乱枝には、そのときの状態を示すのに合わない「来ます」「来ました」「来て きましょう」がある。

(例5) 父は 毎朝、駅で 電車を _____ あいだ、新聞を 読みます。

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1 待って (15.5) | 2 待った (2.4) |
| * 3 待って いる (79.6) | 4 待って いた (2.2) |

3級 (1986)、正答率：0.796、識別力：0.397

(例5) は、アイダと絡めて、それに前接するのがテイル形であることを問うている。錯乱枝には、アイダに前接しない「待って」、また、「毎朝～読みます」という習慣を示すのに合わない「待った」「待っていた」がある。

(例6) 父は、弟が 前から _____ 自転車を たんじょう日に 買って やりました。

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1 ほしい (11.4) | 2 ほしがる (10.4) |
| 3 ほしそうに (6.5) | * 4 ほしがって いた (70.5) |

3級 (1987)、正答率：0.705、識別力：0.433

(例6) は、ガルとテイルとを組み合わせたガッテイルを、連体修飾の形で用い、ガッテイルNを問うている。錯乱枝には、連体修飾にならない「ほしそうに」、三人称主語に合わない「ほしい」、状態を示すのに合わない「ほしがる」がある。

③単一的にテイルを問う場合

呼応や修飾と関係のない形で、また、他の文法項目とも組み合わせないで、テイル自体を問うている場合である。

(例7) でんきが ついて _____。ですから ヘやが くらいです。

- | | | | |
|--------------|---------------|-----------------|----------------|
| 1 います (16.0) | 2 あります (17.8) | * 3 いません (28.3) | 4 ありません (36.6) |
|--------------|---------------|-----------------|----------------|

4級 (1987)、正答率：0.283、識別力：0.296

(例7) の錯乱枝には、テイルの対にテアルを、さらに、否定の対に肯定を置いて、構成されている。

4. 困難度の上がる問い方

まず全体的に、問い方のパターンごとの、出題数、平均正答率、平均識別力を、表2に示す。
なお、2級の問題項目は、3級の問題項目との重ね合わせであるため表に示さない。

表2. 問い方のパターンごとの出題状況

	4 級			3 級		
	出題数	平均正答率	平均識別力	出題数	平均正答率	平均識別力
正しい活用形を問う	8 問／23回	0.658	0.423	0 問／23回	—	—
複合的にテイルを問う	8 問／23回	0.321	0.304	20問／23回	0.547	0.384
単一的にテイルを問う	7 問／23回	0.371	0.251	10問／23回	0.474	0.302

4級では、正しい活用形を問う場合の平均正答率0.658と比べると、複合的にテイルを問う場合の0.321、単一的にテイルを問う場合の0.371は、それほど高くない。さらに、単一的にテイルを問う場合は、平均識別力が0.251であり低い。正しい活用形を問う場合以外は、4級ではやや難しい問い方のようなのである。一方3級では、複合的にテイルを問う場合で、平均正答率0.547、平均識別力0.384、単一的にテイルを問う場合で、平均正答率0.474、平均識別力0.302を示す。どちらの場合も4級の数値よりも高くなっており、これら二つの場合は、4級の文法項目を用いていても、3級での出題の方が適当であるように見える。

次に、個々の問題項目について、それぞれの問い方のパターンごとに、困難度の上がる要因を検討する。

4.1 複合的に問う場合と単一的に問う場合とに共通に見られる困難度の上がる要因

4.1.1 テアル、テオク

一つめは、テアル、テオクとの判別である。『出題基準』において、テアルは4級の文法項目、テオクは3級の文法項目であるから、テオクが錯乱枝になるのは、3級の問題項目からである。そして、過去23回分の問題項目を見ると、4級でも3級でも、錯乱枝のテアルあるいはテオクが選ばれやすい場合とそうでない場合とがあることがわかる。テアルあるいはテオクの実験率が上がるのは、対象が、「お金」「果物」「電気」「辞書」「ドア」「コーヒー」「自動車」「氷」「ジュース」「ナイフとフォーク」「お湯」といった「物」である場合であった。一方、対象が、「たくさんの人」「友だち」「あの人」といった「人」である場合には、テアルあるいはテオクの実験率は高くなっていない。すなわち、対象が「人」である場合には、4級レベルでも、テイルかテアルかの判別ができ、また3級レベルでも、テイルかテアルかの判別、加えて、テイルかテオクかの判別ができる。しかし、対象が「物」である場合には、3級レベル

でも、テイルかテアルかの判別、テイルかテオクかの判別が難しい、ということである。

次の(例8)(例9)(例10)は、対象が「人」である場合である。

(例8) この レストランは いつも たくさんの 人が _____ ね。

1 ならんで あります (8.9)

2 ならべて います (34.1)

* 3 ならんで います (47.7)

4 ならべて あります (9.1)

4級 (2006)、正答率：0.477、識別力：0.151

4級問題項目(例8)の対象は「人」であり、錯乱枝にテアルがある。選択率を見ると、「ならんで あります」と「ならべて あります」とを合わせて18.0%、「ならべて います」と「ならんで います」とを合わせて81.8%であり、テアルの選択率は高くない。テイルとテアルとの判別は難しくなかったといえる。

(例9) 駅に 着くと、友だちが むかえに 来て _____。

* 1 いました (69.3)

2 おきました (14.8)

3 みました (11.0)

4 ありました (4.5)

3級 (1986)、正答率：0.693、識別力：0.325

3級問題項目(例9)の対象は「友だち」で、「人」であり、錯乱枝にテアルもテオクもある。選択率を見ると、「ありました」は4.5%、「おきました」は14.8%であり、どちらも、「いました」69.8%と比べて低い。テイル、テアル、テオクの判別は難しくなかったといえる。

(例10) 夕方に なって、会社で 働いて _____ 人たちが 帰り はじめました。

1 しまった (14.6)

2 おいた (4.3)

3 いった (14.6)

* 4 いた (65.1)

3級 (1984)、正答率：0.650、識別力：0.561

3級問題項目(例10)の対象は「人」であり、錯乱枝にテオクがある。選択率を見ると、「おいた」は4.3%であり、「いた」65.1%と比べて低い。テイルとテオクとの判別は難しくなかったといえる。

一方、次の(例11)(例12)は、対象が「物」である場合である。

(例11) ドアが しまって _____。しめて ください。

1 ありません (36.6) * 2 いません (18.5)

3 あります (18.5) 4 います (17.0)

4級 (1991)、正答率：0.275、識別力：0.264

4級問題項目 (例11) の対象は「ドア」で、「物」であり、錯乱枝にテアルがある。選択率を見ると、「ありません」と「あります」とを合わせて55.1%、「いません」と「います」とを合わせて35.5%であり、テアルの選択率が高い。テイルとテアルとの判別は難しかったといえる。

(例12) ナイフと フォークが テーブルの 上に ならんで _____。

* 1 います (19.2) 2 あります (45.5) 3 します (5.0) 4 おきます (30.1)

3級 (2001)、正答率：0.192、識別力：0.190

3級問題項目 (例12) の対象は「ナイフとフォーク」で、「物」であり、錯乱枝にテアルもテオクもある。選択率を見ると、「あります」は45.5%、「おきます」は30.1%であり、「います」19.2%よりも高い。テイル、テアル、テオクの判別は難しかったといえる。

4.1.2 自動詞・他動詞

二つめは、自動詞・他動詞の判別である。『出題基準』において、動詞の自他の判別は4級の文法項目として挙げられている。しかし、4級でも3級でも、選択枝に自動詞と他動詞とを入れて問題項目を設定すると、自他ともに選択率が高くなる。3級レベルでも、自動詞と他動詞とを正確に判別できている受験者は少ないということだろう。以下に例を示す。

(例13) ドアが _____。

1 しめます (12.6) 2 しめて います (35.3)

* 3 しまって います (27.8) 4 しまって あります (24.1)

4級 (2003)、正答率：0.278、識別力：0.228

4級問題項目 (例13) は、自動詞「しめる」と他動詞「しめる」との対である。選択率を見ると、「しまって います」と「しまって あります」とを合わせて51.9%、「しめます」「しめて います」とを合わせて47.9%であり、自他ともに選ばれている。なお、「しめます」にはテアルの要素がないため、厳密には、「しまって あります」との自他の対になっていない。

錯乱枝に「自動詞+テアル」対「他動詞+テアル」の要素も加われば、さらに難しい問題項目になると考えられる。

(例14) あ、 お金が _____。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| * 1 おちて います (22.9) | 2 おちて あります (27.7) |
| 3 おとして います (18.3) | 4 おとして あります (30.9) |

3級 (2005)、正答率：0.229、識別力：0.309

3級問題項目 (例14) は、自動詞「おちる」と他動詞「おとす」との対である。選択率を見ると、「おちて います」と「おちて あります」とを合わせて50.6%、「おとして います」と「おとして あります」とを合わせて49.2%であり、自他ともに選ばれている。さらにそこに、テイル対テアルも関わるため、3級でも正答率が低いのであろう。

(例15) A「もうすぐ おきゃくさんが 来るから、おゆを わかして ください。」

B「もう _____。」

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 わいて ありますよ (19.2) | 2 わかして きますよ (16.8) |
| * 3 わいて いますよ (17.0) | 4 わかして おきますよ (46.9) |

3級 (2002)、正答率：0.170、識別力：0.073

3級問題項目 (例15) は、自動詞「わく」と他動詞「わかし」との対である。選択率を見ると、「わいて ありますよ」と「わいて いますよ」とを合わせて36.2%、「わかして きますよ」と「わかして おきますよ」とを合わせて63.7%であり、正答の自動詞よりも、他動詞の方が多く選ばれている。自他の選択率が、(例13) (例14) のように拮抗していないのは、後ろ部分が「ありますよ」「きますよ」「いますよ」「おきますよ」と全て異なる文法項目で設定されているからであろう。誤答選択枝であるにもかかわらず、「おきますよ」の選択率が非常に高い。テイルかテオクかの判別を問うと困難度が上がるということは4.1.1で述べたとおりである。

4.2 複合的に問う場合に見られる困難度の上がる要因

4.2.1 マダ

一つめは、マダである。『出題基準』では、「マダ～肯定」も「マダ～否定」も4級の文法項目であるが、問題項目を見ると、4級でも3級でも、正答率は低い。

まず、マダ～テイナイの場合を示す。

(例16) 「さくぶんは もう 出しましたか。」

「いいえ、まだ _____。」

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 書きました (10.6) | 2 書かないでした (10.5) |
| * 3 書いて いません (27.5) | 4 書きませんでした (51.0) |

4 級 (1998)、正答率 : 0.275、識別力 : 0.206

(例17) A 「わたしの 作った おかし、どうでしたか。」

B 「あのう、まだ _____。」

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 食べません (21.5) | * 2 食べて いません (29.6) |
| 3 食べませんでした (42.5) | 4 食べなかったでした (6.3) |

3 級 (1998)、正答率 : 0.296、識別力 : 0.317

4 級問題項目 (例16) でも 3 級問題項目 (例17) でも、マセンデシタの選択率が高く、正答のテイマセンを上回っている。「出しましたか」「どうでしたか」という問いに引かれて、選んでしまったと考えられる。一方、同じマダ〜テイナイの問題項目でも、困難度が上がらない場合がある。(例18) がその例である。

(例18) としょかんの 本は まだ _____。

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 かえさないでした (17.6) | * 2 かえして いません (54.6) |
| 3 かえしました (15.6) | 4 かえしましょう (12.0) |

4 級 (2004)、正答率 : 0.546、識別力 : 0.398

4 級問題項目 (例18) の錯乱枝には「かえしません」や「かえしませんでした」が無い。その点が (例16) や (例17) との違いである。すなわち、マダ〜テイナイの問題項目は、〜マセンや〜マセンデシタを錯乱枝に入れなければ、困難度は上がらず、4 級レベルになるといえる。次に、マダ〜テイルの場合を示す。

(例19) 「コーヒー、もう いっぱい いかがですか。」

「いいえ、けっこうです。まだ 入って _____ から。」

- | | | | |
|----------------|---------------|---------------|----------------|
| * 1 います (19.0) | 2 いません (27.5) | 3 あります (23.4) | 4 ありません (29.4) |
|----------------|---------------|---------------|----------------|

4 級 (1992)、正答率 : 0.190、識別力 : 0.141

(例20) 「コーヒー、もう いっぱい いかがですか。」

「いいえ、けっこうです。まだ 入って _____。」

* 1 います (22.8) 2 いません (24.8) 3 あります (31.9) 4 ありません (20.3)

3級 (1992)、正答率：0.228、識別力：0.207

3級問題項目 (例20) は、4級問題項目 (例19) との重ね合わせであるが、ともに正答率が低い。対象が「コーヒー」で、「物」であるため、3級でも、テイルかテアルかの判別は難しい。このことについては4.1.1で述べた。さらに加えて、この問題項目では、肯定か否定かの判別も難しいようである。

4.2.2 シカ

二つめは、シカである。これも『出題基準』では4級の文法項目であるが、問題項目を見ると、4級では正答率が低い。4級では、テイルかテアルかに加えて、文末が否定か肯定かでも迷うと見えて、正答率が低い。以下に例を示す。

(例21) じどうしゃは 一だいしか とまって _____。

1 あります (29.5)

2 います (21.2)

3 ありません (34.6)

* 4 いません (14.3)

4級 (1988)、正答率：0.143、識別力：0.277

4級問題項目 (例21) の選択率を見ると、「いません」と「ありません」とを合わせて48.9%、「います」と「あります」とを合わせて50.7%であり、否定も肯定も選ばれている。シカとの呼応で否定を選ぶことは難しかったといえる。

一方、3級では、(例22) のように、シカとの呼応で、否定を選ぶことはできるが、テイルかテアルかでは、やはりまだ迷うようである。

(例22) じどうしゃは 1台しか とまって _____。

1 あります (12.8)

2 います (11.4)

3 ありません (40.3)

* 4 いません (35.3)

3級 (1988)、正答率：0.353、識別力：0.387

3級問題項目 (例22) の選択率を見ると、「いません」と「ありません」とを合わせて75.6%、「います」と「あります」とを合わせて24.2%であり、肯定の方はあまり選ばれなくなってい

る。シカとの呼応で否定を選ぶことは難しくなかったといえる。

4.2.3 クテとガッテ、タイとタガッテイル

三つめは、クテとガッテとの判別、そして、タイとタガッテイルとの判別である。ガル、タガルはどちらも『出題基準』で3級の文法項目であるが、問題項目を見ると、3級では、人称を正しく認識して、クテとガッテとを、また、タイとタガッテイルとを判別するのは難しいようである。以下に例を示す。

(例23) ストープが ないので、子どもたちは _____。

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 さむく いる (8.7) | 2 さむいで いる (9.2) |
| 3 さむくて いる (49.5) | * 4 さむがって いる (32.4) |

3級 (2001)、正答率：0.324、識別力：0.390

3級問題項目 (例23) は、ガル+テイルがターゲットになっている。選択率を見ると、「さむくて いる」が49.5%であり、正答選択枝「さむがって いる」の32.4%を上回っている。「いる」がすべての選択枝に共通であり、非文法的な形であるにもかかわらず「さむくて いる」が多く選ばれているところを見ると、テイルに関係なく、「さむくて」と「さむがって」との部分で迷ってしまったのだと考えられる。

(例24) A「ここで 少し 休みますか。」

B「はい。子どもたちも _____。」

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1 休みたいです (39.2) | 2 休みたがります (13.4) |
| 3 休みたかったです (10.7) | * 4 休みたがって います (36.5) |

3級 (1995)、正答率：0.365、識別力：0.344

3級問題項目 (例24) は、タガル+テイルがターゲットになっている。選択率を見ると、「休みたいです」が39.2%であり、正答選択枝「休みたがって います」の36.5%を上回っている。同じタガルでも、「休みたがります」は13.4%と低く、状態を示さないものは排除できている。つまり、タイとタガルというよりも、より厳密には、タイとタガッテイルとの判別で迷っていると考えられる。

5. 垂直等化された問題項目での検証

野口他（2007）は、等化分析の趣旨について、これまでの JLPT の分析と対比し、次のように述べている。

すべて級別に分析結果を示すにとどまり、異なる級に属する問題項目の困難度や識別力を相互に比較検討することが不可能であった。また、試験の結果についても異なる級の受験者間で得点を相互比較することができなかった。仮に各級における問題項目の性質を相互に比較することができれば、学習者は自らの受験級だけでなく、JLPT が測定する全能力範囲の中に自分を位置付けることができ、より広い学習の見通しを得ることができる。教育側にとっても、教材作成や教育カリキュラムへの効果、学習者への支援など、日本語教育の面で望ましい効果があると考えられる。（野口他 2007：70）

そこで本節では、参考までに、野口他（2007）の等化分析によって示された項目パラメタ値⁽³⁾を使って、平成13（2001）年度 JLPT のテイルの問題項目がそれぞれの程度のレベルであるのかを見てみる。

野口他（2007）によると、「読解・文法」の平成13（2001）年度 JLPT の各級受験者の潜在特性尺度値⁽⁴⁾の平均値は、4 級：-2.28、3 級：-1.49、2 級：0.03、1 級：1.61であり、この値を基準に、等化後の困難度パラメタが、どの程度のレベルに相当するのかが判断できる。

以下、平成13（2001）年度のテイルの問題項目（例25）（例23）（例12）について、等化後の、困難度パラメタ、識別力パラメタを用いて検討していく。困難度パラメタは、数値が大きいほど困難度が高い。なお、（例23）は4.2.3でも、（例12）は4.1.1でも取り挙げた問題項目である。

（例25）A「じしょを かして ください。」

B「ごめんなさい、_____。」

1 もちません (8.2)

2 もちませんでした (12.6)

* 3 もって いません (37.7)

4 もって ありません (41.0)

4 級 (2001)、正答率：0.377、識別力：0.306

等化後 困難度パラメタ：-1.378、識別力パラメタ：0.362

（例25）は単一的にテイルを問う場合で、テイルかテアルかの判別が問題となる例である。等化後の困難度パラメタ：-1.378を、潜在特性尺度値の平均値と比較すると、3 級の-1.49と2 級の0.03との間にあり、3 級により近いレベルに相当していることがわかる。

『出題基準』において4級の文法項目とされていても、問い方によって問題項目は、3級レベルを測るのに適したものにもなれば、3級以上のレベルを測るのに適したものにもなる。したがって、問題項目を設定する際には、文法項目自体のレベルが設定されているだけでは足りず、問い方によるレベル設定をすることがより重要となる。問い方によって、その文法項目の級よりも高いレベルの困難度を示す問題項目にもなる、という見方は、今回対象としたテイルに限らず、他の文法項目についても有効であろう。全ての文法項目について、その文法項目自体のレベル設定だけでなく、問い方によるレベル設定にも留意することで、受験者の能力を的確に測ることができるのではないか。

なお、今回は、形式から、テイルという問題項目を分析し、困難度の上がる要因の解明に努めた。今後は、習得状況とも関わらせて、なぜ、それらの要因が関わると困難度が上がるのかということについての分析も行わなければならない。また、テイルの意味用法、例えば、動作の継続を示すものか結果の状態を示すものかの違いが、問題項目の困難度に関わっているかどうかはまだ明らかでないため、これについても今後分析を行いたい。

〔注〕

⁽¹⁾ 本稿では、「選択肢」「錯乱肢」でなく「選択枝」「錯乱枝」を用いる。

⁽²⁾ 「一つの目安としておよそ0.3から0.7程度の範囲に入る項目がよい項目だといわれている（この値はあくまで目安であり、テストの目的によっても変わってくる）。」（『分析報告書』2006：45）

⁽³⁾ 「項目反応理論では、テストの項目の特性はすべて「項目特性曲線（Item Characteristic Curve ; ICC）」と呼ばれる曲線で記述される。この曲線は、（中略）潜在特性尺度値が大きい被験者の方が小さい被験者よりもその項目に正答する確率が高く、逆に、潜在特性尺度値が小さい被験者の方が大きい被験者よりもその項目に正答する確率が低いことを表わす。」（渡辺・野口1999：.3）

⁽⁴⁾ 項目反応理論（Item Response Theory ; IRT）による困難度パラメタと識別力パラメタとの値を指す。

〔参考文献〕

- 国際交流基金・財団法人日本国際教育支援協会（2006）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社
日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会監修『日本語能力試験分析評価に関する報告書』国際交流基金・財団法人日本国際教育支援協会
野口裕之・熊谷龍一・大隅敦子（2007）「日本語能力試験における級間共通尺度構成の試み」『日本語教育』135号、70－79
渡辺直登・野口裕之（1999）『組織心理測定論—項目反応理論のフロンティア—』白桃書房

